

イングランド英語の発音の最近の傾向と標準語の概念についてー 単語リストの録音資料を用いてー

牧野武彦(中央大学)

mackinaw@tamacc.chuo-u.ac.jp

1. はじめに

外国語の音声の研究には、常にデータ資料入手という壁がつきまとい、どうしても現地の研究者による研究の輸入になりがちである。これを憂えた私は、昨年(2001)の日本英語学会大会で「記述的英語音声学に対する日本からの貢献」というワークショップを共同で企画した。そのワークショップで、私自身はある日本メーカーからの依頼に応じてイギリスとアイルランドの方言音声収集用単語リストを作成し、それに基づいて収集された音声データの提供を受けたことを紹介し、このような形でのデータ収集もあり得るということを示すとともに、一部を予備調査して結果を提示した(牧野 2002)。

本発表はそれを受けて、対象をイングランドに絞り、最近のイギリス本国での記述的研究・発音辞典に見られる記述と、上記のデータとの間に相違点があるかどうか、あるとすればどのようなものであるかを精査する。特に注目するのは、一時の一枚岩が崩れつつあるように見受けられる発音表記体系において、発音辞書・音声学書間で用いる記号に食い違いが見られる部分についてである。可能であれば、どの表記が妥当であるか、データを元に判断を示したい。

2. 検討箇所とその問題点

2.1 STRUT の母音 /ʌ/

この母音に関しては、記号の使用に揺れはみられないが、ある意味では本発表で取り扱う問題をもっとも如実に反映している母音でもある。[ʌ] の記号そのものは、半開・中舌・非円唇母音を表すものであるというのがIPAの規定であるが、イギリス英語においては、strut の母音がこの母音で表すには適切なものではなくて久しく、現在は半開・中舌・非円唇母音の [ɐ] であるとされる。実際、The International Phonetic Association (1999) の解説では、worry のスペクトログラムに付加する表記としてこの記号を用いている。

音素の記号として用いるだけならまだいいのであるが、Wells (1982) などは音声表記を行なう場合でさえ半開・中舌・非円唇母音に [ʌ] の記号を用いており、音声的に半開・中舌・非円唇の母音が現れたときに一体どの記号を用いるのかという懸念も生じる。

このようなことから、一刻も早く /ɐ/ に表記を変更することが望まれるのであるが、本発表においては、手持ちのデータが実際にそのような傾向を持っていることを確認する。

2.2 TRAP の母音 /æ ~ a/

この母音は伝統的に /æ/ と表記されてきており、IPAで CV3 [ɛ] と CV4 [a] の中間に取って [æ] が設けられているのは、あたかも英語のこの母音のためであるかのように

見える。イギリスの標準的発音でこの母音が低めになる傾向があることは指摘されていることであり、それを反映して /a/ と表記する文献も現れてきているのであるが、ここでは、この母音の変化が /æ/ を捨て去るのに足るものなのかどうか問題となる。

2.3 BATH の母音 /ɑ: ~ a/

いわゆる ask-words として、イギリスでは /ɑ:/ で表記されてきているものである。しかし、ODP では、これらの語に対して一律に /ɑ:, a (=æ)/ の表記を与え、いわゆる short a を一律に /æ/ とする発音も標準的発音の範囲に入るとの主張を展開している。本発表では、その主張がどの程度データに表れているのかを観察することになる。

2.4 SQUARE の母音 /eə ~ ε:/

この母音は伝統的には二重母音とされているが、最近、単母音化の傾向が頓に強まっている。そのことから、伝統的な /eə/ に対して /ε:/ の表記が現れてきているのであるが、本発表で用いるデータはどのような傾向を示すであろうか？

2.5 NURSE の母音 /ɜ: ~ ə:/

日本などでは弱母音の /ə/ と同じ記号を用いて /ə:/ と表記されているこの母音は、イギリスでは /ɜ:/ と表記されるのが普通であった。しかしこれも、/ə:/ という表記が現れてきている。IPAの /ə, ɜ/ の違いの規定、および弱母音の /ə/ との関係という観点から観察したい。

2.6 PRICE の母音 /aɪ ~ ʌɪ/

この母音は /aɪ/ という表記が定着しているのであるが、ODP は /ʌɪ/ という表記を導入してきた。この辞書の /ʌ/ の用法から考えて、出だしが ([a] の表す開・前舌・非円唇ではなく) 半開・中舌・非円唇であるということを表そうとしたものと考えられる。そのあたりがデータで裏付けられるかどうかを観察する。

2.7 DRESS の母音 /e ~ ε/

イギリスの標準的発音では、この母音は CV2 [e] と CV3 [ε] の中間に位置し、「特に区別の必要がない限りは普通のローマ字を用いる」という音素表記の記号選択の原則に基づいて /e/ が採用されていると考えられる。しかし、この母音は TRAP の母音とともに、低めになる傾向が認められているものであり、/ε/ で著す文献が出てきたのはその反映である。データでどの程度その傾向が見られるかを観察する。

2.8 THOUGHT, FORCE, NORTH の母音 /ɔ:/

この母音に関しては、最初に扱った STRUT 同様、表記に揺れはみられない。しかし、この記号を選択した Jones の時代より、この母音は高くなる傾向を続け、近年の記述では CV6 [ɔ] と CV7 [o] の中間であったから、その時点で /o:/ に表記が変更されていても不思議ではなかった。更に、LPD2, EPD16 などの発音解説では、この母音は実際に [o:] にまで高まっていることが示唆されており、ますます /o:/ への変更が要請される状況になっていると考えられる。本発表でも、データによりその傾向を追う。

3. データによる考察

私が入手している音声データの性質については、牧野（2002）で述べている。また、具体的な観察については予稿締め切りの時点で未だ進行中であり、内容については発表当日までお待ちいただきたい。

4. おわりに

私が提供を受けたものは、多少の問題点も含む比較的小規模なデータではあるが、同一条件で多くの人々から直接録音されたという長所を持つため、いずれの辞書・研究書がより新しい傾向を反映しているのかをある程度見出すことができていると考えられる。

あまりに保守的な表記体系に関しては、実際の発音から乖離してしまって評判の悪い英語の「綴り字」と同じ道を発音表記がたどってしまいかねない恐れがあり、一部にはIPAの原則に反するという弊害をも生じている。英語の標準的イギリス発音は、記号体系の標準化も進んでいることがその特徴であり長所でもあったが、変化が確定的になったのであればできるだけ機動的に表記も変更することが望ましいと考える。

また、今回は標準的なイギリス発音についての検討になったが、同様の問題は標準的なアメリカ発音にも存在すると考えられるため、これもデータがそろい次第検討を加え、アメリカ・イギリス双方にバランスのとれた表記体系の整備をすることを念じたい。

参考文献

- International Phonetic Association, The. (1999) The Handbook of the International Phonetic Association. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jones, Daniel, Peter Roach, James W. Hartman and Jane Setter. (2003) English Pronouncing Dictionary. 16th ed. Cambridge: Cambridge University Press. [EPD16]
- 牧野武彦 (2002) 「イギリス・アイルランド 5 都市の母音」 日本英語学会第 20 回大会ワークショップ「記述的英語音声学に対する日本からの貢献」(2002 年 11 月 16 日、於青山学院大学).
- Roach, Peter. (2001) English Phonetics and Phonology: A Practical Course. 3rd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Upton, Clive, William Kretzschmar, Jr. and Ray Konopka. (2001) The Oxford Dictionary of Pronunciation for Current English. Oxford: Oxford University Press. [ODP]
- Wells, J. C. (1982) Accents of English. Cambridge: Cambridge University Press.

Wells, J. C. (2000) Longman Pronunciation Dictionary. New ed. Harlow:
Longman. [LPD2]